

青年招へい事業
アフターケア調査チーム報告書
平成10年(1998年)度

JICA LIBRARY



J1156691(6)

国際協力事業団

JICA
113
36
TAY
LIBRARY

青 招
JR
98-31

**青年招へい事業
アフターケア調査チーム報告書**

平成10年(1998年)度

国際協力事業団



1156691 [6]



① 同窓会 (PAMAJA) 訪問



② 帰国青年と市内視察
(KLタワー)



③ 帰国青年の職場訪問
(国内取引・消費者省)
(Ministry of Domestic Trade & Consumer Affairs)



④ 帰国青年の職場訪問
(パームオイル研究所)



⑤ 同窓会メンバーと夕食会



① JICA タイ事務所
岩月所長 小西職員より説明を受ける



② 帰国青年の職場訪問
(Bangsai Art and Crafts Training Center)



③ 同窓会との懇談会
(会長宅にて)



④ 国立青年局 (NYB) との意見交換



⑤ 帰国青年の職場訪問
(Bairy Belle co., LTD)



① JICA フィリピン事務所にて、
後藤所長と



② フィリピン外務省表敬訪問



③ 同窓会との意見交換会



④ 帰国青年の職場訪問

目 次

I. 概要報告	1
II. 国別報告	5
1. マレーシア	7
2. フィリピン	27
3. タイ	51

[国別報告構成]

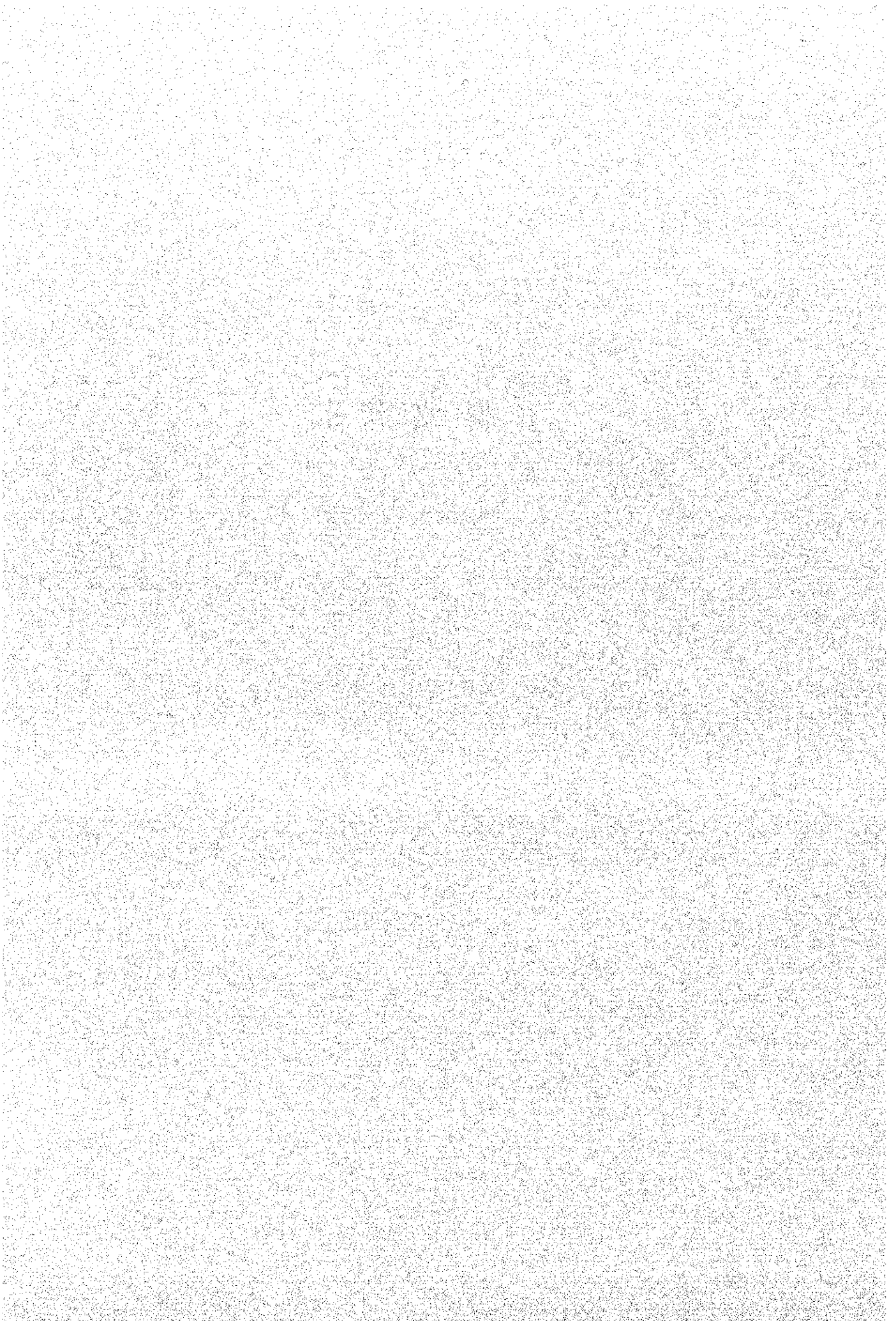
I. 調査目的

1. 調査目的
2. 調査内容
3. 調査団員

II. 調査結果

1. 日程
2. 主要面談者
3. 調査結果概要
4. 現地調査・活動内容結果
(表敬・訪問先における意見交換や聴取内容／帰国青年活動状況／セミナー・交流会／ホームステイ／その他)
5. 所感及び提言

I. 概要報告



I. 概要報告

1. 目的

青年招へい事業において、わが国での交流プログラムに参加した日本人青年等を ASEAN諸国等に派遣し、ASEAN青年の本邦招へいをもって開始された本事業を双方向の交流に発展させ、本事業参加経験者の日本理解及び研修成果をさらに深め、再交流を促進し、来日時に形成された友情をより発展させ、永続的な友情関係を樹立することを目的とする。

2. 派遣対象者

分野別都内プログラム関係者、分野別地方プログラム関係者、共通プログラム関係者等
「青年招へい事業」日本側関係者

3. 派遣国及びチーム編成

平成10年度は、ASEAN3カ国に対し、1カ国につき1チーム、合計3チーム(12名)を派遣した。各チームは、チームリーダー1人とチームメンバーにより編成されている。

4. 派遣日程

派遣国	実施協力団体	派遣期間
マレーシア	財団法人 日本ユースホステル協会	平成10年10月30日～11月6日
タイ	社団法人 勤労厚生協会	平成10年11月19日～11月26日
フィリピン	国際協力事業団 九州国際センター	平成11年2月4日～2月10日

II. 国別報告

マレーシア

平成10年10月10日～11月6日

財団法人 日本ユースホステル協会



I. 調査目的

1. 調査目的

- ・ マレーシアの実情を、体験を通して把握する。又、帰国青年の活動現場を視察し意見交換を行い、今後の青年の受け入れに役立てる。
- ・ ホームステイを通して一般の家庭の中に入り、実際の生活習慣・食事等を体験して今後の来日青年の生活面でのケアの参考とする。
- ・ マレーシアJICA事務所を訪問して、マレーシア国の事情を把握し、アフターケアの調査を円滑に進むよう参考とする。
- ・ 青年招へい事業の窓口であるマレーシア同窓会(PAMAJA)を訪問して、参加者と意見交換を行い今後の招へい事業の改善に役立てる。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団(JICA)事務所

マレーシア国の事情、JICAの活動内容、青年招へい事業の運営状況等を調査する。

(2) ホームステイ

一般家庭に入り実際の生活を体験して、食事・生活習慣などに触れ、今後の受け入れにおいて参考にする。

(3) 帰国青年の活動現場

帰国青年が、「21世紀のための友情計画」に参加し、日本でどのようなことを学び、体験し、それが実際の職場でどのように活かされているかを調査し、今後の参考にする。

3. 調査団員

	氏名	所属先	(青年招へい事業との関わり)
リーダー	住吉 順二	(株)オーガンピーアンドエス	分野別都内プログラム 講師
メンバー	山根 麻貴	(株)ベンチャーリンク	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者
メンバー	鳥谷部 幸	NTT(株)東京法人営業本部	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者
メンバー	唐沢 有紀	(株)日本ユースホステル協会	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者

II. 調査結果

1. 日程

10月30日(金)

- 13:10 成田空港発 (JL723 便)
- 19:30 クアラルンプール国際空港着
- 21:40 パンパシフィックホテルチェックイン

10月31日(土)

- 10:30 ホテル出発
- 10:40 同窓会訪問(於：プトラプレイス)
- 13:30 ホームステイ先へ

11月01日(日)

- 終日 ホームステイ

11月02日(月)

- 09:00 ホームステイ先よりホテルへ
- 10:00 1997年度帰国青年とクアラルンプール市内視察
(KLタワー、ペトロナス・ツインタワー)
- 12:20 マレイシアユースホステル協会訪問、昼食
- 13:40 ホテル帰館
- 14:25 ホテル出発
- 14:35 1997年度帰国青年とディスカッション
- 17:30 ホテル帰館

11月03日(火)

- 08:50 ホテル出発
- 09:00 JICA 現地事務所訪問
- 10:00 プルモダラン・ナショナル・ベルハド(PNB) 訪問
- 12:00 昼食(於：PNBビル内のレストラン)
- 13:20 ホテル帰館
- 14:00 ホテル出発
- 14:15 マレイシア政府観光局訪問

- 15:45 国内取引・消費者省訪問
- 17:30 ホテル帰館
- 19:00 JICA 事務所所長、職員と夕食(於：パンパシフィックホテル)

11月04日(水)

- 08:35 ホテル出発
- 09:10 パームオイル研究所訪問
- 12:00 昼食
- 14:00 1998年度帰国青年とディスカッション(於：パームオイル研究所)
- 17:00 ホテル帰館
- 19:50 ホテル出発
- 20:00 同窓会メンバーと夕食(於：シーフードレストラン)
- 22:15 ホテル帰館

11月05日(木)

- 12:00 ホテル出発
- 12:40 同窓会会長と昼食(於：メトロジャヤ)
- 14:00 クアラルンプール市内見学
(セントラルマーケット、国立モスク、クアラルンプール駅、そごう)
- 23:10 クアラルンプール国際空港発(JL724便)

11月06日(金)

- 06:35 成田国際空港着

2. 主要面談者

- | | |
|--------------------|---|
| (1) JICA 現地事務所 | 西牧 隆壮 所長
飛田 賢治 職員 |
| (2) 同窓会 | Mr. ABDUL RAHMAN BIN ABDUL RAZAK
(PAMAJA 会長) |
| (3) 国内取引・消費者省 | Mr. LIM PANG KUAN
(Principal Assistant Director) |
| (4) マレーシア政府観光局 | Mr. AMMAR ABD. GHAPAR (Assistant Director) |
| (5) マレーシアユースホステル協会 | Mr. NOR AZMAN (Hostel Supervisor) |
| (6) パームオイル研究所 | |

3. 調査結果概要

今回の調査では1週間と短い期間ではあったが、多くの帰国青年との再会を通じ、一層の友情をあらためて確認することができた。

青年招へい事業に関する意見交換は、訪れた先ごとに各種の要望が出るなど、熱心な意見が交換され、現地におけるこの事業に対する期待の大きさ、関心の深さを実感させられた。

また、帰国青年の職場訪問では、各職場での活動状況をつぶさに見学させてもらい、青年招へい事業の成果の一端を見ることができた。そのことは各職場における上司の方々の私たちに対するきめ細やかな接遇に示され、今回の調査の目的を十分に達成できたものと確信する。

さらに、ホームステイでは、現地の結婚式に参加したり、ホストファミリー手作りのマレー料理のもてなしを受けるなど歓待され、一般家庭における生活習慣を3名の女性スタッフは体験。そのため後日、市内のシーフードレストランで催された同窓会メンバーとの夕食会では、一層の盛り上がりを見せた。このことは今後の受入れ時の参考として、必ずや役立つものと思われる。

なお全日程を、PAMAJA(PERSATUAN ALUMNI PROGRAM PERSHABATAN ASEAN-JEPUN ABADKE-21, MALAYSIA)のメンバーの方々が随行してくれて、ホスピタリティ溢れたその対応には、感謝の気持ちで一杯だった。こんな対応は現在の日本人には決して

できないものと思われた。

同時に現地JICAの西牧隆壮所長、飛田賢治さん、通訳を担当してくれた諸江修さんをはじめとした方々に、綿密なコーディネートをして頂いたお陰で、充実した調査を実施することができた。

4. 現地調査・活動内容

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ. マレーシアユースホステル協会

現在、マレーシア国内にユースホステルは5ヶ所あり、クアラルンプールにある2ヶ所の施設のうちの1ユースホステルを見学しながら説明を受け、昼は隣接された屋外のマレー料理店で昼食をごちそうになった。

年間を通しての平均利用状況は、30%から40%とのこと。部屋の種類は4人部屋と10人部屋があり、ベット数は72、男性と女性のフロアに分かれている。各フロアには洗面室とシャワールームが備えられていたが、温水はなかった。簡単な料理ができるキッチンやミーティングルーム等も利用できる。宿泊費はクアラルンプールの場合一人あたりRM20と格安である。利用者は学生、スポーツの選手団やバックパッカーなどが多く、国別にはオーストラリア、続いて日本の旅行者が多いとのことだが、近年は日本人の利用者が減ってきているので、ぜひもっと利用してほしいとのことであった。ちなみに、旅行者向けの各種ツアー等の手配も行っており、ホステルの掲示板には日本語のツアーガイドが紹介されていた。マレーシアではユースホステルの知名度はまだ低く、途中で道をたずねたが、その存在を知らない人が多かったように思う。PAMAJAの中でも知らない人が多かった。

ロ. 97年度参加者とのディスカッション

97年に中小企業グループとして来日した参加者から日本での滞在経験から学んだこと、感じたこと、そしてプログラムに対する意見などを聞いた。主なものを以下に列挙する。

- ・日本人は時間に非常に正確で礼儀正しく、かつ勤勉である。
- ・各分野で優れた技術を持っており、マレーシアに技術的にもっと協力してほしい。
- ・日本で得た経験を家族や職場の同僚に伝えることから始めている。

プログラムに対する意見としては、主に以下のような声があった。

- ・1ヶ月の滞在ではスケジュールがきつく、十分ではなかった。
- ・午後のセミナーなどは集中力がなくなってしまうので、時間帯を考えてほしい。
- ・移動時間が非常に長い日もあったので、工夫して短くしてほしい。
- ・帰国後も日本語を継続して勉強できるようにJICAで何らかのサポートをしてほしい。

その他、日本経済の今後の動向や教育問題、家族問題、青少年の問題、老人問題、雇用問題、外国人労働者の問題、固定相場制の問題、都市問題、公害問題など幅広いテーマで意見を交換した。

ハ、JICA マレーシア事務所

マレーシアにおけるJICAの活動概要について、西牧所長から直々に説明を受けた。また、マレーシアの生活状況や宗教、気候、民族、最近の政治経済状況などの全般的な説明をいけた。今年の英連邦競技大会の開催に伴い、巨大な国際空港を完成させ、新交通システムの電車(L. R. T., Komuter)やモノレールを建設し、更なるインフラ整備を進めていることなども伺った。さらに西牧所長から、ホームステイを通して私達がどのような経験をし、マレーシアについてどのような印象を持ったか、など質問された。またマレーシアの人々を理解するためには、まずイスラム教についての基礎知識が肝要であると語られ、「小説旧約聖書」という本を勧めてくださった。

青年招へい事業については、2000年以降も継続して行われることが決定しており、優秀な人材を受け入れていきたいと考えているとのことだった。

ニ、98年度参加者とのディスカッション

パームオイル研究所にて、主に98年度参加者と青年招へい事業についての意見交換を行った。以下に主な意見、感想を記載する。

- ・日本人は非常によく働き、創造的で、企業としても優れた技術と競争力を持っている。
- ・日本人は時間に非常に正確である。
- ・技術を身につけて帰るには1ヶ月の滞在では短かった。
- ・会社訪問では設立の経緯や経営理念についてレクチャーを受けるだけでは実態がよくわからないので、終日仕事場に滞在させて欲しかった。
- ・ホームステイプログラムが短かった。できれば4泊5日にしてほしい。
- ・日本人青年との合宿セミナーは3日間では短かった。

また、私達のホームステイの感想などを聞かれた。最後にJICA職員の飛田氏より、青年招へい事業の今後の展望等について説明があり、日本側からの謝辞を述べた。

(2) 帰国青年活動状況

イ. 同窓会 (PAMAJA)

PAMAJAの設立経緯、理念、メンバー構成等について会長のラーマン氏以下同窓生より説明を受ける。1987年8月13日に設立され、現在に至る。日本とASEAN諸国との永続的な関係を築くと同時に同窓生同志の結束を固めることを主な理念とし、非常利団体として運営されている。

マレーシアからの「21世紀のための友情計画」の参加者は自動的に同窓生として登録されることもあり、現在のメンバーは約2千人にのぼる。年齢は18歳から45歳、職業も広い範囲に渡っており、マレーシア全土に散らばっている。同窓生からの会費等がPAMAJAの運営費として充てられている。

設立以来、日本の各種団体と数多くの交流を実現させている。クアラルンプール日本人学校の生徒を地方の家庭にホームステイさせるなどのプログラムも実施している。

また、「21世紀のための友情計画」参加者の事前研修などもPAMAJAが請け負っている。さらに、AJAFA (ASEAN-JAPAN FRIENDSHIP ASSOCIATION FOR THE 21ST CENTURY) の積極的な活動団体として、ASEANで持ち回りで開催している AJAFA Regional Youth Campなどをマレーシア国内で開催している。将来的にはPAMAJAオフィスや研修施設の取得、運営資金の獲得、「21世紀のための友情計画」の参加者の選考権利の取得などを目指している。

ロ. Permodalan National Berhad (PNB)

マレーシア国内の民族間の経済格差を縮小するために設立された国営の投資会社であるPNBでは、そこで働く帰国青年から説明を受けた。

PNBは非上場の成長企業に投資し、主に個人に信託証券を販売し、高利回りの運用を行っている。また、個人が預貯金の習慣、投資スキルを身につけることができるよう、12歳から29歳の低年齢層向けにも Vision2020 Unit Trust という信託を提供している。

目下、PNBの最優先の課題はブミプトラの株式の保有率を全体の30%にまで押し上げることであるが、現在は20%位に留まっている。

ハ. マレーシア政府観光局 (Malaysian Tourism Dev. Board)

時間が1時間弱と少なかったが、ビデオなどを通して説明してもらった。

観光局の目的として、

1. 国の文化を発展させる

2. 来国者を増やす
3. より長く滞在してもらうこと
4. 観光収入(財源、revenue)を増やす
5. 国内の観光を発展させること
6. MICE(会議 etc.)を増やし、質を向上させること

以上があると聞いた。

97年には、日本人旅行者は約30万9千人(前年度比では12.8%減少)でシンガポール、タイに次いで第3位であると知らされた。また、マレーシアの観光のポイントとして、美しいビーチ、友好的な人々、安全であること、多民族国家、気候が良いこと、英語が通じること、食べ物やショッピング施設が良いことや、様々な国際リゾートがある、などが挙げられ、これらに力点を置いていることがわかった。

日本には東京、大阪にも同局の事務所があることも知った。また、クアラルンプールで第16回英連邦競技大会(Commonwealth)のあった今年は、'Sport & Recreation98'とスローガンを掲げていたり、来年は、F1グランプリやワールドカップゴルフなどの国際的イベントも開き、外国人客も増やそうとしていることがわかった。

ニ. 国内取引・消費者省 (Ministry of Domestic Trade & Consumer Affairs)

1990年に Ministry of International Trade & Industry から独立してできた国内の商取引を扱っている省である。国内の商取引を管轄し、一般消費者の保護が主な担当分野である。

商取引の管轄に関しては、健全な取引が行われるよう指導、監視を行い、法律違反を取り締まっている。一般消費者に関しては、消費者の権利と責任についての理解を広めるためにテレビやラジオ、セミナーや展示会を通じて一般消費者に訴えかけている。また、国内の商品の価格情報を常にキャッチし、需要と供給がうまくバランスが取れるように監視を行っている。

ホ. パームオイル研究所(PALM OIL RESEARCH INSTITUTE OF MALAYSIA: PORIM)

はじめに当研究所についてのビデオを見せてもらい、その後施設を見学しながら椰子の実からの油の取り方の説明を受けた。そして、実際に椰子の実(すいか2個分位)についている種を見せてもらった。

最終製品としては、食用としてはカップ麺や缶詰など、非食用油としては洗剤や石鹸の他、日本のメーカーのシャンプーやローションなどに加工されていることを聞いた。その他、屋根のタイルやゴムブーツなどの加工製品を見せてもらった。またパームオイルを燃料にした車のエンジンが動く様子(低公害、環境に優しい車になる)を

見せていただいた。

更に、非食用品の研究開発センター内も見学させていただいた。そこでは、JICAの単独機材供与による大型の解折装置等もあって役立っているようだった。パーム油の最大輸出国は、日本であるとのこと。(当研究所からは、中小企業グループの他、科学グループなどでも21世紀のための友情計画に参加している人が多く、当日も7～8人程集まってくれた。)

(3) セミナー・交流会

イ. PAMAJA 主催交流夕食会

当日は、帰国青年や彼らの家族が多数集まってくれた。マレーシアの民族舞踊を鑑賞しながら、魚介類の鍋を囲んだ。帰国を明日に控え、全員で記念写真を撮るなどして名残惜しい一時を過ごした。

(4) ホームステイ

氏名	ホスト氏名	ホスト職業・参加年度・家族構成
山根 麻貴	Ms. Zuraudah Yahya	公務員 1997
鳥谷部 幸	Mr. Suarni B. Sumorno	公務員 1997 妻、息子2人
唐沢 有紀	Ms. Kamariah BT. Hassan	公務員 1993

(5) その他

イ. クアラルンプール市内視察

4日目には97年度帰国青年とのKLタワーの展望台に登り、市内を眺望した。市内の様々な名所について説明を受けた。その後移動し、ツインタワーに入っている伊勢丹デパートも見学した。また、最終日にはセントラルマーケット、国立モスク、クアラルンプール駅校舎、そごうなど市内の主だった見所をPAMAJAのメンバーの案内により見て回った。

ロ. マレーシア JICA 事務所長及び職員の方との夕食会

パンパシフィックホテルの4Fの日本食レストラン「樺」にご招待頂いた。お忙しい中、滞在中の留意点や安全対策等を説明して頂いた。また、日本とマレーシアの文化の違いやイスラム教についての話題に花が咲いた。

5. 団員所感

(1) 調査団所感

今回のマレーシア・アフターケア調査団に参加して痛感したことは、友情計画の受け入れ母体であるPAMAJAの若いメンバーが、日本との交流に大きな期待を寄せ、今後ともこの企画が継続されることを真に熱望していたことだ。

訪問する先々で日本の滞在時の思い出や、産業、文化、教育、伝統など幅広いテーマについて真剣な眼差しでその印象を語ってくれた。わけでも「日本人は勤勉で、親切、礼儀正しく、時間に正確」等々、外交辞令抜きで語られると、何だかこそばゆい気持ちになったのも実感である。

こうした彼らとの真の交流を図り、実り多いものにするためには、出発前にもっと丹念な事前調査と予備研修が必要であることを一方で感じた。そうでないと先方から求められる問いかけに、こちらがどう返答したらよいかとまどったり、逆に失礼な対応をしてしまうのではないかと心配になる。

例えば、国家観についてのディスカッションでは、私たち日本人(特に若い人たちは)それに明確に答える訓練を日頃はしていないので、もの足りなさを感じたのではないだろうか。また、先方の専門分野の質問には、こちらもそれなりの予備知識がないと一般論でしか対応できない。

ことにマレーシアが国を挙げて力を入れている国営信託銀行(PUB)での対話では、アジアの金融についての理解が前提となる。また、マレーシア最大の産業であるパームオイル研究所で「何か質問がありますか」と問われても、そのテクノロジーの本質が理解できていないと、核心をついた話し合いに達しないのも事実だった。

他方、マレーシアとの交流に関しては、この国の多くの人たちが敬虔なイスラム教徒であるということは決して忘れてはならない。日本での受け入れ、特に歓迎会やホームステイ時には、彼らの宗教に根ざした生活習慣を理解した上での対応が求められることを実感させられた今回の訪問であった。

(2) 団員所感

イ. アフターケア調査団に参加して

住吉 順二

1997年、1998年の分野別プログラムの講師を務めたことが縁で、今回の「マレーシアアフターケア調査団」に参加した。

マレーシアのことについては、テレビ、新聞報道と観光用ガイドブックから得た情報がほとんどで、正直、断片的なものでしかなかった。

現地に到着してまず驚いたことは、今年からオープンしたクアラルンプール新空港の施設の素晴らしさ。さらに近代化され自然の景観を巧みに生かしたクアラルンプール市

内の街並の美しさは目を見張るものがあった。その街並の中にはツインタワービルに代表される、高層ビルがいくつも建ち並び、新しいビルの建設が続けられていた。

ちなみにビルや建設中のモノレールの構造躯体は、日本のものと比べていささか細目で、強靱さが欠けているように思われたが、これは「マレーシアでは地震が発生しないからでしょう」と現地の人から聞かされた。

クアラルンプール市内は、9月20日にアンワル前副首相が逮捕されたことをめぐっての小規模のデモがあり、若干の交通規制が敷かれていたものの、治安は概ね保たれて平穏であった。むしろ間近に迫ったAPEC開催に向けて、横断幕や各国の小旗が揚げられるなど、活気を呈しており、経済危機というマスコミ報道がにわかには信じられない程、人々の表情はイキイキとしているように見受けられた。

余談だが、9月1日より実施された「資本取引規制の導入」については金融関係者にとっては評判の悪い規制だが、「為替変動による生産計画の見直し」が生じる製造業(主に現地に進出した日本企業の間で)にとっては、それなりに評価されているむきがあるように見受けられた。

滞在中の7日間はかなりハードな日程であったが、ほぼ予定通り消化でき、各地で行われた意見交換は別記の通りで、時間が不足する程熱心に行われた。

また、全日程にはPAMAJAのメンバーが随行してくれて、心あたまる親切な対応をして頂き、本当にありがたかった。

以下は7日間の日程の中で体験、見聞きしたことをアトランダムに記してみた。

■多民族国家のマレーシアの実状

マレーシアはマレイ系、中国系、インド系住民による多民族国家ということだが、隣国のシンガポールとはいささか様相が異なって見えた。

職業や住宅など各民族間の棲み分けがなされ、“マレイ系優遇策”が浸透しており、互いの交流と融和はさほど密ではないみたいだ。それは同窓会組織のPAMAJAの活動にもあらわれており、主体はマレイ系のメンバーで構成。中国系、インド系のメンバーはほとんど見受けられなかった。

■宗教警察の存在

夜、食事に行った際に聞かされたのがこの宗教警察の存在である。これはイスラムの教義をもとに、主に風紀や倫理面を取り締まる警察で、強い権限を有しているようだ。

なるほど夜の公園などでは日本の若い男女のような行動はまったく目にするこ

はできないし、カラオケバーなども深夜の12時過ぎには一斉に店を閉める。その徹底ぶりは半端ではないようだ。

■熱心な日本語学習の意欲

「日本人と日本語で話がしたいので、現在、日本語の特訓中」、「日本の友人とEメールなどで交流したい」、「JICAが日本を訪問した参加者を対象に日本語教室を開いてくれればうれしい」などと、日本語の学習に関する意欲がきわめて旺盛だ。

語学に不安のある私は、今回、日、英、マレーシアの3カ国語を併記した基本会話の抜粋をコピーして持参。これをメンバーに見せたところ「コピーをとらせて欲しい」との申し出を何人かの人から受けた。

■現地の新聞から

ホテルに届けられた現地の英字新聞に目をやったら「クアラルンプールの郊外で虎に襲われて食べられた」という記事が一面に大きくとりあげられていた。現地の人のお話によると、こうしたニュースがよく出るそうで、他に“野生の象に踏み殺された”、“ニシキヘビに子供がまるごと呑み込まれた”というニュースもよく聞かれるとのこと。

これは野生動物がたくさん存在していることを示すものであるが、半面、開発が進み、行き場のなくなった野生動物の生態を示すものではないだろうか。

ロ. アフターケア調査団に参加して

山根 麻貴

何しろPAMAJAの同窓会の方々が大変お世話になり、日本とマレーシアの交流が深く永続的なものとして根づき始めていることを肌で実感した1週間であった。

98年の2泊3日の合宿セミナーで出会った帰国青年だけでなく、面識のない97年度以前の帰国青年も大勢で私たちを受け入れてくれた。いろいろな意見があった中でも特に印象に残ったマレーシア人の宗教、国民性・愛国心、女性の地位について簡単に触れて所感としたい。

宗教－イスラム教では日に5回のお祈りの時間があり、ホームステイ先のホストも私に気を配りながらも「ちょっとお祈りをするので待っていて」と言い、身を清め床に敷き物を敷いてお祈りをしていた。町の中心のメッカに巡礼に行くための資金を賄うための財団があり、財団の大きなビルがそびえていた。いかに生活の中で宗教が重要な指針となっているのか実感する場面に短い滞在期間中に幾度となく遭遇した。

マレーシア人はまた、家族をととても大切にしており、中でもホームステイを通じて、情の深さ、家族のつながりを大切にする心に触れることができた。家族が常に一緒に、

何かの集まりがあるときは必ず夫婦、もしくは家族で参加していた。私たちの送迎会の時も、帰国青年が妻や夫、子供達と一緒に連れてきていた。私のホストであるズライダさんも彼女の母親、祖母を敬い、常に感謝の気持ちを持っている女性だった。自らを省みる良い機会となった。

愛国心—PAMAJAの理念の中にも愛国心の養成が掲げられていた。1カ所に様々な宗教、様々な人種の人々が混在しており、国として統制をはかるためにも愛国心が必要不可欠でもあるのだろう。今回のアフターケアで出会った方々はとりわけ自国に誇りを持ち、自国の経済や政治の発展に強い関心を持っていた。PAMAJAの活動にどうしてそんなに熱心なのかという私たちの率直な問いに対しても、「私たちは新しい世代としてマレーシアの国家を発展させたい。」という答えが帰ってきた。「日本を発展させたい」というような類の言葉は私たちのような若い世代の日本人の口からはあまり出てこない。国家という概念に対する考え方の違いを強く感じた。

国民性—私のホストのズライダさんは、国から奨学金を得てアメリカの大学と大学院を卒業している。夜、夕飯の後に彼女のアメリカ時代のアルバムを何十冊も見せてもらった。アメリカでは同じマレーシア人のルームメイトと一緒にルームシェアをしていた様だ。マレーシアの友人4人とアメリカ各地を旅行したときの写真が多くあった。ちょうどその日のマレーシアの新聞にも最近のマレーシア人の留学事情に関する記事が載っており、マレーシア人は海外にいても同郷の者同士で固まって他の国の人とあまり交流しないと書いてあった。また、マハティール首相は外貨準備や優秀の人材の流出をこれ以上増やさないために今後国費留学の費用を縮小すると述べていた。マレーシアでは国費留学の帰国後10年間は政府機関で働かなければいけないので、ズライダさんも政府機関に勤めている。最も親しかった友人の一人はアメリカ人と結婚し、そのままアメリカに住んでいるとのこと。その友人に関する彼女のコメントが印象的だった。「彼女はアメリカ人と結婚してしまったの。彼女の両親のことを思うと本当に痛むわ。ご両親がかわいそう。」

女性の地位—おそらく日本よりも多くの女性が職場で活躍している。職場では男女は完全に平等で、多くの女性が要職に就いているとのこと。子供もベビーシッターに預ける習慣があり、ダブルインカムで家計を支えている場合が多いようである。日本のように子供が1人や2人ならまだしも4人5人兄弟がめずらしくないマレーシアでは女性が子育てをしながら立派な職に就いていることは驚きであった。女性の人口比率が男性に比べて格段に大きいこともあり、この国は女性の労働力なしでは国が成り立たないことが伺える。

私はこれまでマレーシアというと「マハティール首相」、「ルックイーストポリシー」、

「マルチメディアフーパーコリドー」などアセアン諸国の中でもとりわけ革新的で先進的な国というイメージを抱いていた。また、出発前に耳に入ってきていたマレーシアに関するニュースはアジア経済危機の中での苦悩、資本規制策、固定相場制の実施やアンワル副首相の逮捕などどちらかというとマイナスのニュースばかりが入ってきていた。今回の青年招へいプログラムに参加するまではマレーシア人とはほとんど交流がなくメディアから入ってくる部分的な情報のみをもとに勝手なマレーシア像を描いていた。実際に現地へ赴き、マレーシアの国の人々に触れて初めて文化や宗教、多民族国家の問題、国民意識等について実際の実情を見て生の声を聞くことができたように思う。何と言ってもマレーシア人の青年が日本に大変関心を持ち、日本人に対しても非常に友好的な感情を持っていることを一日本人としてとても嬉しく感じた。若い世代の私たちにこのように草の根レベルで交流の場を提供してくださったJICA及び関係団体の皆さんにこの場をお借りして感謝の意を表したい。

ハ、アフターケア調査団に参加して

鳥谷部 幸

私は、マレーシアの人々には、本当に親切にしてもらいました。

特に、ホームステイに行った時に見たこと、体験したことは、非常に強いマレーシアの印象として私の胸の中に多く残ったように思います。

私が3日間お世話になったのは、98年度の中小企業グループのリーダーを務めていたスアルニさんという男性で、彼には奥さんとの間に、アムザドとアムジャーという2人の息子さんがいました。丁度偶然に、私がステイした初日の夜は、半島の南方のジョホール州のムアールにある彼の実家で、親戚の人が集まって夕食をする予定があり、それに私も参加させてもらうことができました。車で「南北高速道路」を4時間くらい行き(南下)、途中マラッカを通過してジョホール州に行きました。途中の道沿いには、マレーシアの国の産業を支える特産品の椰子の木やゴムの木などが、山ごと植えられて育っている緑豊かなこの国特有の風景が車から見えました。マレーシアの人の明るくおおらかな性格も、このような暖かく、自然豊かな大地によって育まれているのではないかと感じました。

他にも、ジャックフルーツやドリアンなど、様々なトロピカルフルーツの木や花もたくさん植えられているのを見ました。スアルニさんはとても親切に、写真をとるために喜んで車を止めてくださったりしました。

ムアールのスアルニさんの実家につくと、そこにはスアルニさんのお母さんと、子供を連れてお母さん達や、男の人達がいました。地方の“Feldescheme”という家で、政府が良い家を国民に提供するためにいくらか援助している家だという事でした。少し高床の1階建ての家でしたが、とても広く、結局その晩は、お祖母さんの家に16人兄弟の

内の11人の家族が集まり、盛大な会がありました。その晩、大人を含めて10人程が、家に泊まったのにも関わらず、1番綺麗なベツトルームを1部屋私に使わせてくださった事は、申し訳ない位で、歓迎してくれた家族皆様に本当に感謝しました。その非常に大勢でのお祈りや食事会では、女性のご馳走を作ったり、綺麗にお皿に盛りつけたり準備し、男性は伝統的な衣装と帽子をかぶり、一つの部屋に集まり、長いお祈りを食事の前にしていました。ホストマザーに聞いたところによると、今回は、来月の12月から始まるイスラム教の断食月の前のお祝いの集まりだったそうです。

マレーシアの地方の人は特に、家族を大切にしている様子がうかがえ、何人もの子供や孫に囲まれて、家の主のお祖母さんはとても幸せそうに見えました。経済が発達して忙しい生活になってきても人の心や家族を大切にする気持ちを忘れないようにしたいと、強く感じました。

また、このムアールの訪問の時は、マレー語やジャワ語だけしか話せない人も多く、英語でコミュニケーションをとることがままならなかったのですが、それでも、ボディ・ラングエージで心を通じさせられて、知らない日本人の私が入っても、快く迎えてくれたところに、本当にマレーシアの人の優しさ、柔軟性を感じました。そこで、食事を盛りつけたり、片付けを手伝った事、床に座って、そのご馳走を女性や子供達と一緒に食べた事は、今後もずっと忘れられない経験になったと思います。

次の日は朝7時頃に家を出て、マラッカに行きました。マラッカはマレーシアの中でも一番歴史のある町で、貿易都市としても栄えた町でした。そこでは「ミニ・マレーシア」という公園に連れて行ってもらい、13州のそれぞれの伝統的な家が建てられているのを見たりすることができ、とてもおもしろかったです。このように、今回クアラルンプール(KL)だけでなく、南の方も見る事ができ、このような機会を与えてくださったスアルニさんにとっても感謝しています。スアルニさんも今は、KLの郊外に住み、毎日KLのオフィスまで行っていますが、子供の時は田舎に住んでいたのも、私たちのような「マレーシア初心者」にKLのような都会だけでなく、マレーシアの実際の顔の一つである田舎の風景や生活を見てもらいたかった、と後から話してくれました。

交流セミナーでは一般的に既に会社や官公庁などで、ある程度実績のあるような方と話し合ったり、職場の周りの話を聞いたりすることが多いと思いますが、今回の訪問でそれらの方々の職場や、それだけでなく背景にある生活や育ってきた文化も見ることができ、肌で感じられたことが、今後の大きな財産になると思います。

これからも双方の国で、産業などの一面だけでなく生活文化・習慣や歴史的背景なども含めた多面的な方向から理解できるような、このような交流計画が発展していけば良いのではないかと感じた1週間の訪問でした。

最後に、このような貴重な機会を持たせてくださった、JICA及び日本ユースホステ

ル協会や関係者の方々に厚く御礼を申し上げたいと思います。

二. アフターケア調査団に参加して

唐沢 有紀

今年の夏にマレーシア青年との合宿セミナーに参加し、マレーシアのことについていろいろ教えていただきましたが、実際に訪れてみて、文化、宗教、経済などホームステイや帰国青年の職場訪問を通して、体験し学ぶことができました。

全日程において、同窓会であるPAMAJAのメンバーが案内してくれました。それぞれの方が仕事をもっているにもかかわらず、半日も交替で私たちに同行して、隅々まで気を配っていただきました。彼らの明るく親切な人柄は、以前から承知していたつもりですが、これほどに手厚い歓迎をしていただき、非常にありがたく、恐縮してしまうほどでした。

ホームステイでは、独身女性で一人暮らしのカマリアさんの家に、カマリアさんの友人でPAMAJAのメンバーでもあるファジラさんと一緒に宿泊しました。彼女の住むマンションの部屋は一人暮らしには充分すぎるほど広く、マレーシアの女性が性別に左右されず、社会で活躍する姿が見える気がしました。

ホームステイ中に突然ファジラさんの友人の結婚式に参加させていただきました。日本での合宿セミナーの中で、マレーシアの結婚式の話を変に興味深く聞いていたのですが、日本とは全く異なるスタイルに、いまひとつ様子がかめずらしたので、自分の目で見ることができ、非常にうれしい出来事でした。

2泊3日のホームステイの間には、マレー料理を教えてもらいながらいっしょに作ったり、カマリアさんの会社の上司のご家族と夕食をとったり、彼女の普段の生活を飾らずに見せてくれました。英語がうまくない私とのやりとりは、とても苦労したに違いないのですが、そんな顔はまったく見せず、本当によくしていただきました。心から感謝しています。

マレーシア滞在中に知り合った人々は皆、日本や日本人に対し友好的で、日本を訪れたことを過去の思い出だけにせず、今も日本に関心を持ち続けてくれていてうれしく思いました。

マレーシアの青年達は自分の国の将来について、一人一人が真剣に考えているようでした。自分はそんなふうには日本の未来について考えたことはなく、彼らが日本人に対し、勤勉で時間にとっても正確な人達だと褒めていましたが、もっと大きなものの見方のできる彼らに自分にはない部分を見つけ、意識改革させられました。

ぜひ日本で彼らと交流をした日本人たちも、その場だけで終わらせず、よりお互いを理解するために今度はこちらからマレーシアを訪問することが重要ではないかと、この訪問を終えて感じました。これから先も、お互いの国の理解を深めながら友情を育てて

いく交流事業が長く続いて欲しいと思います。

(3) アフターケアに関する提言

イ. 問題点

- ①日程はすべてクアラルンプールだけだったので、郊外も訪れてみたかった。
- ②滞在中の詳細スケジュールが出発前日に知らされたため、事前の情報が不足していた。特にホームステイ先の家族構成などが分からず、持参するお土産の選択に困った。
- ③イスラム教・文化・多民族国家の実態について理解していくべきであった。

ロ. 問題点の原因又は理由

- ①受入れてくれた帰国青年の多くが「クアラルンプールだけではもったいない。地方にも行った方がいい」と薦めてくれたため。
- ②受入れの主体となったPAMAJAという組織がボランティアの団体であること。また、会長のラーマン氏の仕事が極めて多忙で、スケジュール調整が遅れたようだ。
- ③マレーシア人の習慣やマナー等の理解だけでは不十分であった。彼らの生活の指針となっている宗教がどのようなものか、事前にもっと予備知識があればマレーシア人や国家に対する理解が深まったであろう。

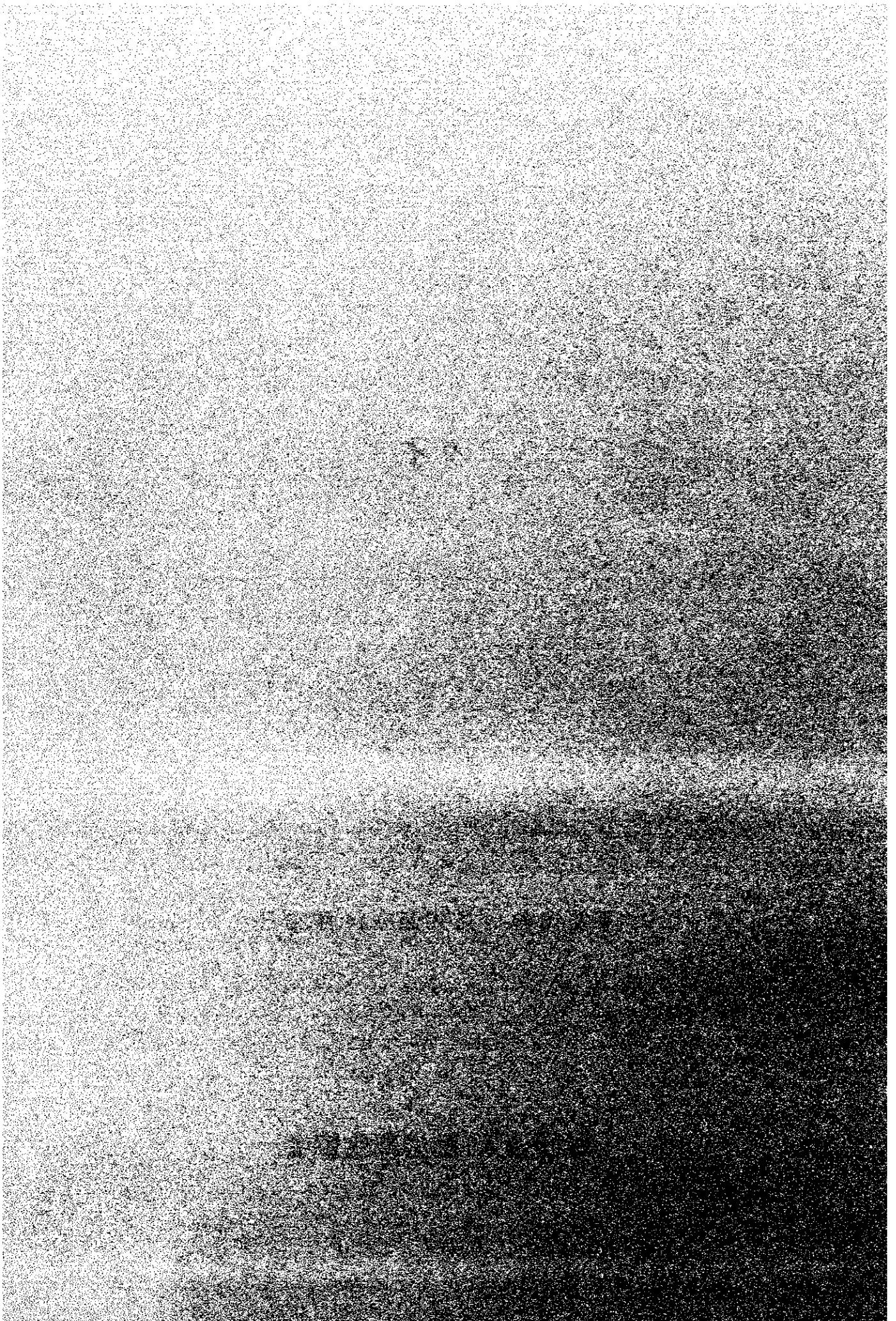
ハ. 改善のための具体的方策

- ①日程を10日程に延長してはどうか。
- ②航空券を正規料金ではなく格安航空券にして、その費用をクアラルンプール以外にも行くために、または滞在日数を延長するために使ってはどうか。

タイ

平成10年11月19日～11月26日

財団法人 勤労厚生協会



I. 調査目的

1. 調査目的

- ・ タイでの青年招へい事業に対する評価を関係機関より聴取し、今後の本事業の改善に寄与する。
- ・ 帰国青年の職場視察を通じ、日本における研修成果の確認を行う。
- ・ 帰国青年との再交流及び同窓会との意見交換を通じ、本事業を相互の青年交流へと発展させる糸口を探る。
- ・ タイの一般事情を視察し、よりスムーズな受け入れ、各種プログラムの改善に寄与する。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency: JICA) タイ事務所訪問

- ・ 青年招へい事業を含む JICA の活動状況

(2) 在タイ日本大使館表敬訪問

- ・ タイの一般事情

(3) 国立青年局 (National Youth Bureau : NYB) 訪問

- ・ 青年招へい事業の運営の現状
- ・ 本事業に対する意見交換ならびに要望事項

(4) 同窓会 (Friendship Youth Alumini) 訪問

- ・ 活動内容及び現状
- ・ 本事業に対する意見交換ならびに要望事項

(5) 帰国青年活動現場訪問

- ・ 日本における研修の成果の確認
- ・ 滞日体験の成果の確認

(6) ショートトリップ (ホームステイの代替プログラムとして実施)

- ・ 帰国青年との再交流
- ・ 本事業に対する意見交換

3. 調査団員

	氏名	所属先	青年招へい事業との関わり
リーダー	猪田 英史	(財)勤労センター憩の家	分野別地方プログラム担当者
メンバー	水野 孝一	豊田市役所	分野別地方プログラム担当者
メンバー	柴田真理子	アイシン精機株式会社	分野別地方プログラム ホストファミリー
メンバー	川面 忍	日本電信電話株式会社	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者

II. 調査結果

1. 日程

11月19日(木)

- 10:30 名古屋空港発(TG737便)
- 14:40 バンコクドンムアン空港着
- 16:30 JICA タイ事務所訪問
- 19:00 デルタグランドパシフィックホテル チェックイン

11月20日(金)

- 07:00 ホテル発
- 09:00 アユタヤ市内視察
- 12:00 昼食
- 14:00 帰国青年の活動現場視察
(Bangsai Art and Crafts Training Center of H. M. Queen Sirikit Of Thailand)
- 19:00 ホテル着

11月21日(土)

- 08:30 ホテル発
- 10:00 同窓会との懇談会
- 12:00 昼食(於:同窓会長宅)
- 14:00 ショートトリップ
'98年度経済Bグループ有志とカンチャナブリ県へ

11月22日(日)

ショートトリップ

20:00 ホテル着

11月23日(月)

08:00 ホテル発

09:00 バンコク市内視察

14:00 国立青年局(NYB)

16:30 在タイ日本大使館表敬訪問

18:30 ホテル着

11月24日(火)

08:00 ホテル発

09:30 帰国青年の活動現場訪問(Dairy Belle co., LTD.)

12:00 昼食

13:30 バンコク市内視察

17:30 ホテル着

11月25日(水)

08:00 ホテル発

09:00 帰国青年の活動現場訪問(Pakkred Babies' Home)

12:00 昼食

14:00 帰国青年の自宅訪問

18:00 調査チーム主催歓送会

11月26日(木)

01:30 バンコクドンムアン空港発(TG738便)

08:30 名古屋空港着

2. 主要面談者

(1) JICA タイ事務所

岩口健二 所長

小西伸幸 所員

(2) 在タイ日本大使館

小暮康二 一等書記官

(3) 国立青年局 (NYB)

Deputy Secretary-General Ms. Sienoi Kashemsanta Na Ayuddhaya

Specialist Planing and Policy Ms. Maleewan Kullavavich

Director External Relations Division Ms. Usanee Kangwanjit

Director Training Division Ms. Porntip Sritipong

Training Officer Ms. Sunee Prathumrat

External Relation Officer Ms. Ammara Insuwan

(4) 同窓会 (Friendship Youth Alumini)

President Mr. Decha Sigvanich

Manager Ms. Muukda Jenthanyawan

Ms. Jitjanya Permpatr

Ms. Wilawan Khewsomboon

(5) 帰国青年活動現場

Bangsai Art and Crafts Training Center of H. M. Queen Sirikit Of Thailand

Relations Officer Mr. Theerawat Krankaewsophon

Ms. Thongjai Prapajun ('98 年度経済 B グループ)

Dairy Belle co., LTD.

Managing Director Mr. Somkiat Jungjaroennorasuk

Ms. Nopparat Jungjaroennorasuk ('98 年度経済 B グループ)

Pakkred Babies' Home

Superintendent Ms. Pannipa Woodtikam

Ms. Nock ('96 年度社会開発グループ)

3. 調査結果概要

(1) 青年招へい事業に対する評価

本事業に対する評価は、全体的に良いという印象を受けた。NYBや同窓会、帰国青年のいずれからも、今後の継続に対する強い要望が出された。すぐに直接的な研修成果が得られる事業では無いだけに、本事業の基本的な考え方を、タイだけでなく日本国内においても、多くの人々に周知させる必要がある。また事務的な進め方について、いくつかの問題点を指摘された。この点に関しては、以下の報告の中に挙げる。

(2) 帰国青年との意見交換

同窓会メンバーとの懇談、帰国青年の職場訪問、ショートトリップ等で、帰国青年との意見交換の場をもった。日本で様々な体験をした帰国青年から、各々の印象や感想を直接聴取することができた。それは、全体的なものから、個々のプログラムに対するものまで、広範囲に及んだ。この点に関する方策については末項に挙げる。

今年度から、タイにおける参加青年の募集方法が変更された(後述)こともあり、また出会った帰国青年の多くが今年度の参加青年であったことから、日本に関心をよせ、日本での経験を活かしている青年が多かったという印象を受けた。募集に関して大きな問題(後述)があったことも忘れてはならないが、自主的な積極的な青年が、参加できるような募集方法を、日タイ双方で検討する必要がある。

(3) 帰国青年と日本側関係者との交流

実施主体や協力団体を通じてプログラムを実施している最中は、組織体の構成員として参加しているが、プログラムが終了した時点から、帰国青年や日本側関係者は、組織体を離れ、個人として交流を続けていくことになる。現に、帰国後も交流を続けているかどうかは様々であった。日本とタイという距離が、物理的にも経済的にも、継続的な相互交流の妨げになっている、ということを改めて認識させられた。

この距離という障害を乗り越えるためには、タイにおいては同窓会組織の更なる発展が必要であり、日本においても関係者のフォローアップのためのシステムを構築する必要がある。特に、日本において、受入関係団体のネットワーク化、あるいはタイの同窓会のカウンターパートとなりうる組織の育成を図る必要があるのではないかと。また、個人として継続的な交流を続けていけるために、動機付けや評価において、プログラム後を見据えた事業運営の必要性を感じる。

(4) タイ及びタイ人

実質7日間という滞在ではあったが、タイの一般事情、タイ人の考え方、食の嗜好、

生活スタイル等の一端に触れることができた。今後、本事業に関わっていく上で非常に参考になった。様々な場面で、タイ人の思いやりの心(帰国青年たちはホスピタリティーと表現していた)や、タイ独特のマイペンライの心や、サバイ(心の心地よさ)を求める生き方に触れることができた。自然で、押し付けることなく、それでいてタイを感じて欲しい、タイを体験して欲しい、という強い思いを随所で感じ、それに応えなければという気持ちが芽生えた。日本において、ともするとプログラムを作成する際に「これも研修のうちだよ。」とあって、安易に流れそうになる点を反省し、プログラムにおいてきめ細かい対応を心掛けたい。

4. 調査結果概要

(1) 表敬先・訪問先における意見交換や聴取内容

イ. JICA タイ事務所

岩口所長および担当の小西氏より、青年招へい事業の状況等について説明を受けた。

- ・平成10年度における青年招へい事業受け入れ状況
- ・年間約70万人の日本人が訪タイしており、在タイ邦人も5万人あまりに上る。日本とタイの間には共通する点も多く、古くから友好国として交流を続けている。共通する点としては、①皇室・王国の存在、②仏教国である、③農耕民族である、等が挙げられる。
- ・現在タイには多くの日本企業が進出しているが、まず問題となってくるのが「労働倫理観」の相違である。タイはすべてのリズムのテンポが遅く、ユツタリとしており、日本企業はこれが理解できない。いろいろな情報から耳にはしていても、実際に現場で対応するとさまざまなトラブルが発生している。日本側、タイ側ともに相手の感覚・行動を理解し合う姿勢が必要である。
- ・本当の相互理解・国際交流は写真や文字でなく、直接触れ合うことで可能となり、その意味でこの青年招へい事業は意義深いものであり、15年にわたる事業の積み重ねが将来のタイのリーダー達に影響を与えている。
- ・参加青年の募集について、昨年まではタイ国内の各団体・機関等から推薦を受けて国家青年局(National Youth Bureau: NYB)が決定していたが、今年はマスメディアを使い一般公募し、面接等により選考した。事業のPRということでは効果があったが、訪日中に問題が発生してしまった。
- ・この事業に対するタイ政府の評価としては、非常に高いものがあり、特にOBで組織している「同窓会」は日タイの架け橋として効果的な役割を果たしている。
- ・JICA タイ事務所で行っている事業(第3国研修等)について説明を受けた。

ロ、在タイ日本大使館

木暮一等書記官より、タイの現況等について説明を受けた。

- ・タイ経済は1994～95年の不動産不況から陰りが見えはじめ、'96年末からの景気後退に伴う海外投資家の資金引き上げから通貨危機を招き、'97年にバーツ切下げを行った。現在のところは通貨も安定をしてきているが、不況は引き続いており、12月から開催される「アジア大会」に期待をしていたが、思いのほか結果には結びついていないようだ。
- ・日本としてはタイの個人年間所得などから、無償援助は現在行っておらず、技術協力をしているのみ。
- ・タイ経済もバブルの崩壊を経験して、社会制度の欠陥によるアンバランスが大きく浮かび上がってきた。それは、従来にも増して、貧富の差が激しくなってしまったことで、タイには基本的に土地の所有に関する税金(資産税)がない、また相続税がない、そして誰も所得の正確な数字を把握していないということが原因と思われる。
- ・しかし、タイの経済・通貨が思ったより早い段階で安定してきた背景には、国民性の持つ多様さ、懐の広さ(マイペンライ)故に柔軟な対応が可能であったことがあげられる。また、地理的なものを含め東南アジア地区の中心としての意識も高く、日本はじめアメリカなども拠点として考えていることがあげられる。
- ・青年招へい事業については、タイ政府内においても交流という意味において、効果は上がっているという評価であり、このようなプログラムを組まなければ、相互理解は無理であろう。また、カウンターパートナーがいないと有効な交流はできない。ただし、本人のみでなく、周りに広げていく努力を互いに行う必要がある。いずれにしても異なる国と国の相互理解には長い時間と多くの人の努力が必要であり、毎年150名、15年にわたるこの事業も本当の成果が出てくるのはこれからだと思う。

ハ、王立青少年局(NYB)

出席した6名の担当者から、本事業に関する評価や要望を聴取するとともに、本事業に参加経験を持つ担当者からはその感想も併せて聴取した。

- ・今年度から、募集方法を変更した。これまでは、NYBが参加を要請したり、関係団体から推薦を受けた者から選考していたが、今回からマスメディアを媒体とした積極的な募集方法を展開した。広く全国から、また様々な層から本事業の参加者を募ることができた。
- ・しかし、参加青年の滞在中の失踪という問題が生じてしまった。その点について

- は、日本側関係者に申し訳なく思っている。また、現在、不法滞在者となってしまった青年を思うと非常に心配である。しかし、今回のような募集方法を継続する限り、身元の照会には限界があり、再発を防止することは難しいかもしれない。
- ・事務的な処理に非常に時間がかかる。例えば、ホストファミリーの名簿などは出発直前にならないと入手できない。タイにはお土産を用意し、先方に訪問するという習慣があり、家族構成が判明しないと、事前に用意することもできない。
 - ・今年から、タイでの事前研修の際に、日本からのコーディネーターが派遣されなくなった。より充実した研修をするため、また生きた日本の情報を知るためにも、コーディネーターの派遣を再開して欲しい。
 - ・参加した感想として、ホームステイと合宿セミナーが非常に印象に残っている。

今回、参加青年の滞在中の失踪という問題と、その原因と考えられる募集方法の変更、という点に話題が集中した。どのような募集方法にも長所と短所があり、一概に結論は出せない。NYBの要請や推薦による募集では、身元が保証されるという長所と、参加青年が受け身になってしまうという短所がある。また公募においては、幅広い層から積極的な青年が参加しやすい長所と、身元の保証という点では自己申告に頼るしかないという短所がある。日タイ双方で、幅広い層から積極的な、問題のない青年を選考する方法を検討する必要がある。

また、ホームステイについて、多くの感想が述べられた。調査チーム側から、「参加する青年が不安を感じているのと同じように、ホストファミリーも不安を感じている。また、ホームステイの評価がホストファミリーに充分伝わっていないし、それを伝えるための十分な資料がない。できれば、ホームステイや合宿セミナーの感想、問題点などをまとめて日本側に伝えていただけないか。これはNYBというよりも同窓会の役割という部分かもしれないが、お願いしたい。」という依頼をしたが明確な回答は得られなかった。

二. 同窓会

- ・青年招へい事業におけるタイからの参加者は15年間でおおよそ2千人であり、その内、同窓会には約千人が登録している。登録者の内500人はバンコク及びその近郊に在住である。
- ・運営資金はJICAからの援助によるところが大きく、他にNYBからの協力もある。
- ・これまで青年招へい事業への参加者の選考はNYBからの縁故が多かったが、今年から一般公募となった。このことで、幅広い層からの参加となったと同窓会では評価しており、今後、青年の選考基準・方法等取り組むべき問題もあるが、それらを

克服することにより、より有意義な招へい事業へ発展すると思われる。

- ・1998年度のタイ青年選考方法について新聞等の公募により約2千人の応募のあった中、150人が選考された。選考方法は、応募者5人で討論し、それを面接員9人が審査する。討論のテーマはグループにより異なる。

テーマの例)社会開発:「リーダーとはどうあるべきか?」、教育:「初等教育とは?」

[活動内容]

- ・年1回、登録メンバーを集めた会合を開き、スケジュール・各企画について決定する。また、幹部によるミーティングは月1回定期的に実施している。
- ・主な取り組みは近隣各国との交流である。

ユースキャンプ・・・1998年 マレーシア主催

1999年 タイ主催

- ・他には、メンバーによる海外旅行を企画(1998年 中国)、障害者への寄付、工場見学等を企画し、実行している。

近隣各国との交流等を継続して行っている点はすばらしいと感じたが、訪日を共通点に結成された会であるのに、日本に関連した活動が少ないのは残念である

[メンバーの持つ日本へのイメージ]

- ・やさしさ、慈悲深さがあることを感じた。
- ・古き良きものが残っている一方で、技術の進歩もすごい。
- ・笑わないイメージがある。

(2) 帰国青年活動状況

イ. Bangsai Art and Crafts Training Center of H. M. Queen Sirikit Of Thailand

この施設(バンサイ)は、いわゆる職業訓練学校と見ることができる。ただし、Royal Projectとして存在する点で、日本には類似を見ないものである。訪問した帰国青年は、ここを統括する工業生産局に勤務しており、一緒に施設を見学した。

Royal Projectとは、簡単に言えば、タイ王室が、農村における人々の生活水準を向上させるために実施しているプロジェクトであり、主に国王は農耕の援助、王妃は農村の人々への工芸品等製作教育を実施しているそうである。

バンサイは、王妃のプロジェクトの1つとして、1981年に設立された施設である。農村の貧しい人々が現金収入を得る一手段としての工芸品製作等の技術を身につけるよう教育を施している。現在は、およそ500名の人々が無償で訓練をうけている。施設の運営には、関係局として、土地局・陸海軍・観光局などがあたり、資金も出している。資金面では、他に、訓練生の製作した製品の販売、施設への入場料も収入源となっている。教育は、手工芸科の技術を教えるものが全26科あり、そのうち私たち

が見学できたのは、金属加工・ガラス細工・染織・パンフラワー細工などである。また、こういった技術教育のみならず、舞踊科・ムエタイ科などといった伝統芸能・スポーツの継承保存にも及んでいる。訓練生が安心して受講できる配慮が素晴らしく、受講料がかからないだけでなく、他県からの訓練生のための寮や子供たちのための幼稚園・学校といった施設まで完備されており、感心した。

バンサイは人々に開放されており、観光客が自由に訓練の様子を見学することができる。また、敷地内には、植物園、鳥類保護園、タイの伝統的家屋展示、水族館といった、娯楽施設も充実しているため、観光客が訪れても飽きることがないと思われた。私たちも、タイの珍しい鳥を見たり、家屋の建築様式の地方による相違を学ぶことができたり、非常に多くの訓練生の秀逸作品を鑑賞したり、と見るべきものが非常に多かった。

センターを見学することで、Royal Projectの一環である施設が広く公開され、多くの人々が利用できることを知った。タイ王室の絶大な人気は、こうしたプロジェクトによっても増大するのであろうと推測でき、人々の心深くに根づく王室への尊敬の念の一端を感じることができたのは非常に良かった。

ロ . Dairy Belle co., LTD.

帰国青年とその夫が経営するバンコク郊外のアイスクリーム工場を訪問した。この訪問は、私たち以外にも興味を持つ人が多く、他の帰国青年も含め、大人数での見学となった。

訪問時は、まず会社概要を説明いただいた後、工場を見学した。説明によると、この会社は、経営する夫妻がチュラロンコン大学3年生の時、1989年に、小さな家内工業として出発し、10年の歳月をかけて、現在の規模一年間売上高1億バーツ、スタッフ250名にまで発展させたとのことである。その中で、経営者が非常にしっかりとビジョンを持っていることに感心した。中小企業のリーダーとなるべく、モットーを掲げ10年計画と目標を持って仕事をしているのである。

また、帰国青年が日本で多くを学んできたことを知り、大変に嬉しく感じた。日本の菓子メーカーの状況、訪問したメーカーに興味を持ったことを語ってくれた。単純に、自分の会社と日本の企業を比較するのではなく、両国における菓子(アイスクリーム)市場の違いをまず把握し、それを踏まえた上で企業の成り立ちの相違を掴み取ったようである。そして、自らの仕事に参考にできる部分は積極的に取り入れていこうという姿勢を持っており、本当に感心した。偶然なのか、本人の行動力なのか分からないが、日本で彼女が興味ある分野の調査ができていることは幸いだと感じた。

青年招へいプログラムに期待される成果を十二分にあげた一例なのではないだろうか。今後、こういった帰国青年が1人でも増えていくことを切望する。

ハ. Pakkred Babies' Home <児童保護センター>

院長のPannipa Woodtikamさんより児童保護センターの概要について説明を受けた後、施設内を視察、その後、センターで働く帰国青年のノックさん(1998年度 社会開発グループのメンバーとして来日)および同僚の女性たちから、彼女たちの仕事について説明を受けた。

[Pakkred Babies Home (児童保護センター) について]

- ・ 0～5才の捨てられた子どもをケアする厚生省傘下の施設である。
- ・ 特殊な環境の元、家庭から離れざるを得ない、また、育ててくれる親もいない子どもたちを育てる目的で1964年に設立された。
- ・ 次のような子ども達が施設で保護されている
 1. 病院または公共の場(路上など)で捨てられた子ども
 2. 崩壊した家庭または社会的に問題を抱える家族があるため、両親が育てる能力がないまたは、育てるのに適していない家庭の子ども
 3. 社会福祉省 (Department of Public Welfare) の管理下におかれている両親を持つ子ども
 4. ホームレス・行方不明者の子ども
- ・ ねらい
 1. 看護を行い、子どもの発育をより良好にする。そうすることで、健康であるとともに年齢に応じた身体の発育の機会が全ての子どもに与えられること。
 2. 愛情を込めた暖かいケアにより、精神面の安定と健康を与えられること。
- ・ 現在、タイでは全国で1000人以上の子どもが施設にて保護されている。生み捨てられる子どもには、生まれつき障害のある子、未熟児、発育不全の子も多く、当センターでは24時間体制での看護・毎週金曜日の医師による診療も実施されている。
- ・ 子どもたちの内、何名かは養子縁組がまとまり、引き取られて行くが、中には、問題のある家庭もあるためその調査も必要である。また、養子縁組がまとまらない子の教育は政府が補助して行く。

[施設内視察・帰国青年の活動について]

施設内はかなり清潔であり、子どもの世話をする職員の数も多く感じた。帰国青年のノックさんは、子どもたちに年齢に応じた教育を受けさせる為の教師として、

サハタイ財団より当センターへ派遣されている。私たちが行った時ノックさんたちサハタイ財団の職員は、子どもたちに昼食を食べさせていた。

子どもたちは、年齢毎にグループ分けされ、昼食もグループ毎にテーブルにつき食べていた。一人一人に皿が配られ食べるのだが、スプーンをほうり投げてしまう子、うまく口に運べず、テーブルの上をぐちゃぐちゃにしている子に対し、サハタイ財団の職員たちは、根気強く面倒を見ていた。障害を持っている子は一人に対し一人職員が付き、食事を食べさせていた。食事の後、サハタイ財団の職員が集まってくれて非常に熱心にいろいろな話を聞かせて下さった。彼女たちは子どもに対し、暖かく・穏やかに接しており、また、仕事に対し誇りを持っていることが感じ取られた。日本人の感覚として、すぐ「このように施設で育てられてかわいそう。」と口に出してしまうが、彼女たちの表情を見ると、「子どもたちは不幸な境遇に生まれてしまったが、職員の方々が毎日精一杯愛情も教育も与えているのだから、“かわいそう”という言葉で片づけてしまっただけではいけないのではないか。」と感じた。ただ、24時間体制でケアするには、やはり人手が足りないらしく、ノックさんたち職員も子ども一人に対してもっと多くの職員がついていてあげたいと感じているそうである。

職員以外に大切な労働力として、ボランティアがいる。当センターでは、火・木曜日は、欧米人ボランティアグループ、土・日曜日はタイ人ボランティアグループが来てくれていて、子どもたちを遊ばせている。また、養子縁組でも、欧米人・タイ人が主で昨年は約100人と聞いた。日本人は支援というと資金援助・物資援助をすぐ考えてしまうが、このような面ではやはり欧米人に比べ遅れていることを感じた。また、タイの人も養子を結構受け入れているようだ。

今回のアフターケアプログラムのなかで、タイ人との共通点がいくつか感じるものがあつたが、日本人の血のつながりを大切にする心が、タイ人の慈悲深さ・寛容性とは異なった価値観となることを感じた。

(3) ショートトリップ

ホームステイの代替プログラムとして実施

- ・ '98年度経済Bグループのメンバー14名とその家族2名
- ・ カンチャナブリ県を中心に、史跡や歴史公園などを訪問